JAPAN BEAR NETWORK

ISSN 1881-3879

BEARS JAPAN

Vol.23-3 March. 2023

This Number

アーバンベア＆四国のクマ保護プロジェクト報告

Bear Scene

■ 今号のクマ写真

撮影地：北海道占冠村　双珠別
撮影者：浦田 剛さん（占冠村）

「白銀の林道コミュニケーション」

雪が積もる林道上にヒグマの足跡。
木製電柱に立ち寄った跡があったので、自動撮影カメラを設置。その後、２頭のヒグマが交互に来て、木柱や雪の匂いを嗅ぐ。寝転んだり雪を掻いたり、吻（ふん）を雪に刺したりする様子が撮影できました。日頃、足跡や自動撮影から個体間の影響力が想起されることはしばしばですが、それらは必ずしも有力個体から逃げたり、異性を追ったりするだけではなさそうで、興味の尽きないところであります。

今号の表紙イラスト

「クマの抱える問題」

ヒグマの中に今回の特集をイメージしたさまざまなクマを描きました。

- 街に出るクマ
- 農作物を目当てに出没するクマ
- ベア・トランクキットを持ったクマ
- 絶滅の危機を救おうと考えるクマ

クマにかかわる問題について考えていただけたらと思います。

蜂矢 愛（東京農工大学）

People

旭山動物園 園長

坂東 元 さん

ばんどう　げん

北海道旭川市出身。酪農学園大学獣医学部を卒業。その後日本最北の動物園である旭山動物園に就職、現在は園長を務めている。旭山動物園園長の坂東元さんにお話しを聞かせていただきました。

――旭山動物園の園長として働かれている坂東さん。動物に関わるようになった、獣医師を目指すことになったきっかけを教えてください。

子供の頃、親が転勤族だったので小学校が何回も変わってしまい、なかなか周りと馴染めないところがありました。でも虫が大好きで、学校の行き帰りにポケットいっぱいに拾ってきたりしていましたね。他にも川に行って亀をとったりと、生き物が家にいないときはなかったと思います。小学校高学年の時にセキセイインコを２羽買ってもらって、繁殖をするようになりました。当時は調べる手段が少なかったので、ペット屋さんに毎日通っていました。中学生になる頃には20羽以上を繁殖・飼育していましたね。鳥が病気や怪我をしても獣医さんに見てもらえなかったので、いろんなインコの飼い方や治し方の本を買ったり、自分でプラスチックを加工して添え木を作ったりしていました。この頃から漠然と犬猫以外もちゃんと見れる獣医になりたいなというのは思ってたんですね。高校の途中で学校に行かなくなってしまい、さらに高校３年では将来の目標みたいなものがなくなってしまっていました。そんな時にもう一度ちゃんとインコの繁殖・飼育をやろうと決意しましたが、原因不明で何匹かいきなり亡くなってしまいました。最後の1羽が本当に苦しんで死ぬしかないという状況で獣医師を訪れて、安楽死も含めて何か楽にしてあげることができないですかという話をしたけれど、自分は助ける側の人間だからそれはできないと言われてしまったのを今でも覚えています。高校の最後に将来について考えた時に、こいつら(インコ)がいたからここまでこれたよな、やっぱり獣医を目指さなきゃみたいなことをふと思ったのがきっかけですかね。

――最近札幌市や旭山動物園が位置する旭川市でもヒグマの市街地出没が多く発生しています。今の現状について坂東園長が考えること、感じることがありましたら、お聞かせください。

最近は動物園のある旭山でもクマが目撃され、旭山公園自体は立ち入り禁止していました。しかし、隣接する動物園は開園し続けていたんですよ。それができるのは、クマの習性や良心に頼ってるからだと思っています。クマは人の気配がするとさっと身を隠すじゃないですか。そんなに遠くまで行っているわけじゃないのだけど、朝には姿が見えているのに昼にはその姿が消えている。多分それはクマ

側が人間の気配がなくなってきてから活動を開始しているから。クマがそういう風に行動してくれるから、人も活動できるっていう一面もすごく強くあるのではないかなと思いますね。

田舎の方に行ったら、結構当たり前にクマいるぞみたいな話ってあるじゃないですか。気にしないなら気にしないでいれる環境っていうのも存在するし、またそれまでは絶対に共存というか許容できないものだと思ってたものが数年すると何か日常の風景みたいになっていることありますよね。「シカ注意」っていう看板はもう当たり前に設置されてあって、シカが飛び出てきて交通事故が起きるから、ゆっくり走りましょうみたいなことも共通認識となってきていますよね。こんな感じでクマに関しても、今後人側の捉え方が少し変わってくる可能性もあるのかもしれないですよね。将来は案外河川敷ぐらい通ったっていいでしょ、当たり前でしょみたいな時代が来るのかもしれないなと思っています。人間って意外と日常の中で慣れてきちゃったりとか、解釈の仕方っていうのも結構平気で変えますよね。だけれども旭山に出てるクマを見て、ずっと今年いるんだなとか、居心地がいいんだなと思うのではなく、ここをクマの居場所にするわけにはいかないから、ちょっとクマに居心地が悪いなって思ってもらえるようなプレッシャーをかけてどっかに行ってもらうということを考えなきゃいけないんだろうなと思うんですね。

現在の対策として罠をかけて、問題グマじゃないクマをどんどん捕っちゃっています。そしていろんな経験したクマが捕まらないから、問題起こしてないクマがどんどん出てきちゃうみたいですね。そこら辺は今後慎重に見極めて、対応していきたいと思います。

――今年の４月に旭山動物園のえぞひぐま館がリニューアルオープンしました。えぞひぐま館を新しくすることになった理由などはあるのですか？

北海道というと自然の豊かさや雄大さが頭に浮かぶと思います。そしてその財産の自然というものを象徴するのがヒグマ。しかしそのヒグマをめぐって実は人の生活といろんな軋轢が生じ、どんどんそれが加速し、明らかに関係は良くない方向に動いてるわけですよね。実際にはすごくいろんな問題を抱えているということを動物園を訪れてくださった方に伝えたいと思っています。

新しいクマ舎は川の豊かさや草原など北海道を感じれるような景色を凝縮しています。また6月になったらさくらんぼ、秋になったらカシワやミズナラのドングリなど季節によって実のなる木を植えていて、

その季節の中でヒグマがどのように生きてるんだなっていうのを感じれる施設にしました。また人ととんこ(ヒグマの名前)の間には本物の道路のガードレールを使っています。ふと見た数十ｍの中にこうやってクマがいてももうおかしくない距離感になっているよ、もはや「山奥にいるんでしょう」ではないんだよっていうことも含め、伝えられるような施設にしたいなと思っています。また、知床財団さんに協力してもらって、館内のブースを作成しました。ヒグマと人の軋轢、ヒグマと人の関係の部分での象徴的なことは知床で全部起きてるので、知床財団さんに絵巻を作ってもらいました。旭川を経由地として知床に向かう人もやっぱり多いので、今起きていること、今現地の人がヒグマ問題の解決のためにやろうとしてること、そういうようなことを知ってもらいたい、気づいてほしいなということがコンセプトですね。

――坂東さん、貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました！

▼えぞひぐま館については
こちら

地球環境基金・活動便り

アーバンベア

こんにちは。アーバンベアプロジェクトワーキンググループ座長（全体調整役）の稲垣です。2020年度から活動を開始したアーバンベアプロジェクトは、今年度、活動最終年を迎えました。新型コロナウイルスの蔓延によって様々な活動の制限がありましたが、多くの方の尽力によって、たくさんの成果を出すことができました。

具体的な成果は年度明けに出版予定の最終報告書に譲るとしまして、今回は、活動に深く関わったメンバーにそれぞれの活動を振り返っていただき、感想や課題を寄稿いただきました。原稿を依頼した皆様には、規定文字数を超える大作をたくさんいただき、改めてアーバンベアに対するさまざまな熱い想いを感じています。

本プロジェクトは、今回ご寄稿をいただいた方々以外にも、非常にたくさんの方の活動参加やご賛同、ご協力によって遂行することができました。この場をお借りして、深く感謝申し上げます。

アーバンベアプロジェクトの概要を載せているBJ vol. 22-3も合わせてご覧ください！

ダイジェスト活動報告

活動1）アーバンベアの現状：なぜ出没するのか？出没させないために → 全国からクマ出没事例を収集し、そのデータ解析および事例集の作成をしました！

活動2）住民の意識向上：クマ問題を自分事としてとらえるために → WEBアンケートにてクマが生息する地域の住民の意識を調査しました！／トランクキットを使ってアーバンベアについて学ぶ・考えるイベントを実践しました！

活動3）普及啓発の底上げ：キットの整備 普及啓発の担い手育成 → ベア・トランクキット・普及啓発動画を作りました！／普及啓発人材育成講座を開催しました！

活動4）情報発信：アーバンベアに関する情報発信 → シンポジウムや行政座談会を開催しました！／ホームページやSNSを活用しました！

クマの市街地出没の背景を解析！

クマ出没事例集作成の総括役

小池 伸介さん

活動1は全国の市街地出没対応の聞き取り調査が主な活動でしたが、私はこれまでクマの市街地出没と関わったことがなかったので、当初は全く現場のイメージができず、現場では何が問題となっているのかも知りませんでした。また、出てくる用語（たとえば、警職法）の意味もよく理解できていませんでした。そのため、各地の現場の最前線で活躍されている会員の方々にいろいろと教えていただきながら、活動を開始しました。また、活動当初はちょうどコロナ禍が始まった時期だったので、皆さんからの熱い思いのこもったメールや、詳細に記載していただいた聞き取り調査票を眺めながら、現場を想像するだけの日々でした。幸い、2年目からは一緒に活動を進めてきた伊藤君や稲垣さんが現場に入ったり、オンラインでの聞き取りなどを行うことで、彼らとの議論を通じてようやく市街地出没の最前線で起きている状況が、少しずつ理解できて来たのが、活動3年目の後半の今です。私は山の中にいるクマしか知らず、世間の多く人が目にする、ニュースで放映される出没してしまったクマのことは知らない「似非（えせ）」のクマ関係者ですが、この活動を通じて少しは真のクマ関係者に近づけたかな？、と報告書を書きながら思う日々です。

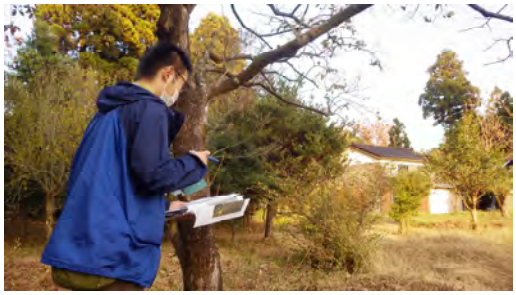
クマの市街地出没に関する解析を行なった

伊藤 泰幹さん

今回の調査に携わり、改めてクマとヒトの軋轢問題は、クマの生態と人間社会の両側面が複雑に絡みあって生じていることを実感しました。クマの出没要因を明らかにし、その要因に対処することの重要性は私が指摘するまでもないですが、各事例の反省点では人間社会の法制度や人々のクマに対する理解の欠如など人間社会側の問題に触れていることが目立ちました。

また、地域によってクマの出没に対する対応がかなり異なることも印象に残りました。その違いは環境や生息するクマの種が異なることなどのクマ側の違いだけではなく、対応を実施する専門の主体がいるかどうかや、警察をはじめとする各機関との関係性などの人間社会側の違いも都道府県や市町村によって異なることを痛切に感じました。

今回の調査からは、出没事例の蓄積ができている地域が少ないことも課題としてあがりました。先述の通り、地域によって出没事例には様々な違いがあります。また、定量化するには少ない事例数かもしれません。しかし、そうした事例からは、共通する対応方法やうまくいかなかった点を抽出できるため、対応の過程を蓄積し、可能であれば他地域と共有する仕組みができるとよいかもしれません。私自身、半ば無意識のうちに事例を分析する際に身近な札幌市と比べながら行っていました。みなさまも身近な地域の出没事例と比べながら他地域の事例を知ることで、次の出没への参考になると幸いです。



ベア・トランクキットを作成！

トランクキット作成の統括役

中島 亜美さん

今までトランクキットの管理は個人で行なってきたため、プロジェクトメンバーと共に一緒に考えながらトランクキットを作成する過程はとても楽しく、また学びの多いものでした。特に印象に残っているのは以下の3点です。

まず、一番大変だったのはティーチャーズガイド作成です。既存のものをベースとしていますが、今回はプロにデザインをお願いするということもあり内容をかなり考えました。オンラインでの意見交換だけでなく、実際集まってプログラムを実演したりもしました。たくさんのことを内容に入れたい気持ちもありましたが、いろんな人がいろんなシチュエーションで使うこと、ごちゃごちゃしていると読んでもらえないかもしれないなどさまざまなことを考慮して最低限の内容だけを載せるようにしました。

次にツキノワグマ新生仔の実物大ぬいぐるみ作成です。ぬいぐるみ作家さんやクマの新生児に詳しい方々にご協力いただき、JBNのネットワークが活かされたと感じました。ぬいぐるみ作成はもちろん、クマの新生仔についても初めて知る知識が多く、作る過程でとても勉強になりました。

最後に、今回のプロジェクト期間はちょうどコロナ禍と被りました。また私の2度目の育休期間中でもあったため、極端に人と接する機会が減った時期でもありました。そんな中、メンバーで久しぶりに集まって作業をした時はとても楽しかったのを覚えています。

今回のトランクキット作成はこれ以外にも各地区代表をはじめ多くの方々にご協力いただき作成することができました。JBNのネットワークの良さが詰まっているトランクキット作成だったと思います。

ティーチャーズガイドの作成リーダー

古坂 志乃さん

私は主にティーチャーズガイド（レクチャー実施者用の指導案）の作成に関わりました。だれでも、どの地域でも、基本的な内容をわかりやすく伝えられるものを目指しました。しかし作成にあたり一番難しく感じたのは「どの地域でも」というところでした。各地のクマに関わる活動をしている方のお話を伺うと、地域ごとに課題はさまざまです。特にクマが出没したときの対応は、極力追い払いを目指している地域もあれば、種々の事情によりほぼ殺処分となる地域もあり、一般化することが非常に難しかったです。改めて問題の複雑さを痛感しました。一方で「まずは街にクマを出さないことが大切」というのは、地域に関わらず共通です。このことが多くの人に伝わるティーチャーズガイドになると嬉しいです。

これから皆様にどんどん活用していただき、ご意見を反映しながら、さらに良いものを目指していきたいと考えています。そして、やはり各地域に即したものはその地域の方の心に響きます。このティーチャーズガイドには一般的なことが書いてあるので、各地の現状に即したものにアレンジしてレクチャーを実施していただければと考えています。

クマについてあまり知らないという人でも使いやすいティーチャーズガイドです。お気軽にご利用ください！

Webアンケートを実施！

市民のクマに対する意識を調査

小坂井 千夏さん

アーバンベアが市街地に暮らす、ごく普通の方にも関わる問題である以上、こうした方々がアーバンベアやクマについてどう思っているのかをまずは知らなければ、効果的な対策の呼びかけ、普及啓発ができないと考え、アンケート調査を実施しました。大規模（合計3,500人！）なアンケート調査の経験はなかったため、この分野に詳しい専門家にアドバイスをもらいながら設問の設定や対象地域を選定しました。国立環境研究所の久保氏、東北大学の豆野氏をはじめ、設問設定や出没情報の照合にご協力にいただいた関係機関の皆様、各地区委員や学生部会の皆様、ありがとうございました。

大変だった点は実施前の下準備です。回答者の住んでいる地域のクマの出没状況によってクマに対する意識が異なるかを調べたかったので、詳細な個人情報とならず、かつある程度の精度で出没情報との照合ができる郵便番号を利用しました。この郵便番号と地域の人口や出没情報（行政によってフォーマットが異なる）を照合する作業を無料で公開されているデータで実施しようと思うとなかなか大変でした…（郵便番号は奥が深いのです）。製品となっているデータの利用で、作業がとても楽になりました。webアンケートの実施にも費用がかかりましたが、調査する地域を郵便番号、住所で指定できるなど、便利な点も沢山です。準備は大変でしたが、プロジェクトのおかげで良いデータが取得でき、興味深い結果を得ることができました。結果について詳しくはプロジェクトの報告書をご覧いただきたいのですが、論文などとしても発表したいと考えています。少しでも、今回の結果が各地域のアーバンベアに関する効果的な対策の推進、注意喚起につながれば幸いです。

クマレクチャーを開催！

神奈川のクマレクチャーと次世代への普及啓発

長縄 今日子さん

会場となった神奈川県山北町は、県西部丹沢山麓に位置し2021年秋にこれまでクマ出没がなかった町中心部で出没や柿の被害が続いた地域です。今回は、若い世代と共に前向きに考える場を作りたいと、小・中学生のお子さんがいる保護者を対象に、お子さん連れでも参加しやすいよう託児スペースを設け、野生動物について学ぶ日本大学の学生にもオンラインで参加いただきました。

冒頭のレクチャーでは、クマの生態と、街にクマが出るとどうなるか、クマが街に出る理由、環境整備や誘引物除去など出没前対策の重要性を伝えました。ワークショップでは、クマが街に出る理由「柿などの果樹放棄」の解決案と実際のクマ出没・痕跡箇所を示した地図を前に、出没原因と経路を推理し対策について考えました。住民からは、子供たちを集めて柿狩りツアー、柿でお菓子を作る、学生さんからは、放置されている作物に価値を付けて取引するなどの意見がでました。会場こそ違えど、共通の課題について考え、学生らしい意見に山北会場も盛り上がりました。被害対策WSというと、行政批判や現場の苦労話で行き詰りがちですが、地域おこし専門家のファシリテートにより、明るく笑顔の中で意見を出し合うことができたこと、地域の実情と地理的要因を抑え、住民目線で具体的に原因と対策について考えたことはとても良かったようです。託児は子供相手２時間に苦労もあったようですが、今後も

子育て世代に参加頂くため、託児を想定した子供向けプログラムを作れるとよいでしょう。

神奈川県は、過疎化が進む中山間地から大都市まで、地域によりクマに対する認識や実情が大きく異なります。コロナ禍で自然豊かな県西部への移住者が増え、クマの生息地と住宅地が隣り合わせの場所も増えつつあります。アーバンベア問題もすぐそこまできているといえるでしょう。今回の実績を生かし、今後も地域に合った普及啓発の仕方を模索していきたいと思います。

「街にクマを出さないために自分たちにできることを考えよう！レクチャー＆ワークショップ」
日時：2022年8月25日（木）13:30～15:30
場所：神奈川県山北町　山北町立生涯学習センター第１、２会議室
参加者：32名

北陸最大級ショッピングモールでの実践統括

白石 俊明さん

会場周辺は2000年のショッピングモール開業を皮切りに急激な宅地化が進む地域です（旧カドミウム汚染田）。近年クマが定着した丘陵からは約8km離れた平野ですが、2019年5月、2020年7月の2回、神通川を通じてクマが出没しています。幸い人身事故は起きませんでしたが、神通川は未来永劫ずっとそこにあるし、周辺の人口も増加しており「次なる出没への備え・当事者意識の醸成」が急務です。若い世代・親子連れの来店も多いことから、過去にとらわれない「令和なクマとの付き合い方」をゲリラ作戦で定着させるぞ！と目論見ました。

北陸はJBN会員が少なく地区会員は3名でしたが、全国からの応援により、精鋭沿い15名のチームで運営できました（JBN会員9名、他6名）。アーバンベアプロジェクトで2021年に拡充した北陸版トランクキットは大活躍で、毛皮や糞の標本、新生仔ぬいぐるみ等が買い物客の目にとまり、「クマの魅力やクマ問題」について知ってもらう好機となりました。学生部会が運営したグッズコーナーもたいへん華やかで、多くの方から応援メッセージをいただきました。活動の核であるレクチャーは1時間おきに6回、毎回担当を変えて実施しました。買い物客の長時間の足止めは難しいだろうと予測し、スライドは20分にぎゅっと絞り、それでも話し手ごとのオリジナリティーは活かした展開にしました。イスに座りじっくり聞いてくださる方は予想以上に少なく、人集めに苦労しましたが、実施後のアンケートではクマに対する意識改革はバッチリで、次につながる手応えを感じることができました。隣で営業しているショップ店員さんが「スピーカーをから聞こえてくる話が楽しく、勉強になる！」とコメントしてくれたり、ショッピングモール職員さんらもレクチャーに参加してくれたりと、「アーバンベア問題」を自分事（我が事）として捉える人口が買い物客以外にもグンと増える成果がありました。正確な数は把握できませんが、少なくとも300～400名の買い物客がJBNブースに立ち寄り、クマについて考える機会・JBN会員と話す時間を持ってくれました。

活動を支援してくださった地球環境基金、会場および遠隔地からもサポートしてくださったJBNの皆様に深く深く感謝しています。

「出る？出た！富山の身近なクマ問題」
日時：2022年10月15日（土）
場所：富山県富山市「ファボーレ」
参加者：レクチャー参加者46名、他に300-400名ほどの買い物客にミニ解説を実施

普及啓発育成講座を開催！

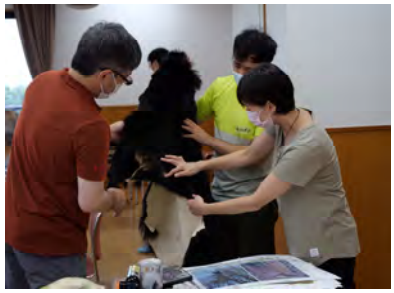
トランクキットでクマの生態を“リアル”に普及啓発

小林 喬子さん

　トランクキット普及啓発人材育成ワークショップの予行演習として、2021年6月に神奈川県立秦野戸川公園でプレワークショップを開催しました。

　NACS-Jの自然観察指導員の方に参加いただき、トランクキットを用いたプログラム案や新しいキットのアイディア等を提案いただきました。

　アーバンベアプロジェクトはコロナ禍でのスタートとなり対面で集まっての活動ができなかった中、久し振りの対面での活動となりました。参加者の方々は実際にトランクキットの教材を見たり触ったりしながら、普段実施している自然観察会での経験も踏まえ、伝え方の工夫や新しいアイディアがポンポンポンと出されました。トランクキットの教材は、クマの生態を理解したりクマを身近に感じたり興味を持ってもらうために、本物（または本物に近い）にこだわって作っています。この様に実際に教材を見たり触ったりしてディスカッションをするのがトランクキットを使った活動の醍醐味です。それが実現できたことがとても嬉しく、有意義な時間となりました。新しいアイディアをもらう事で、新しいキット作成へのモチベーション向上、活用が広がる様に頑張ろう！と気持ちを新たにしました。



「トランクキット普及啓発人材育成ワークショップ（プレ）～ベアトランクキットの使い方を考えよう～」
日時：2021年6月27日（日）13:00～15:45
場所：神奈川県秦野市　秦野ビジターセンター
参加者：6名

地域に合ったさらなる普及啓発を目指して

三枝 弘典さん

　今までヒグマのトランクキットを使った普及啓発活動には携わってきましたが、ツキノワグマを扱うのは今回が初めてでした。トランクキットの中身は大きく変わりませんが、地域に応じて少し違うので、機会があれば比較してみてください。また、ぬくぐるみ工房さん作成の新生仔のぬいぐるみも新しく中身に加わり、より楽しめる内容になったと思います。

　イベント中の会話を通じて、地域が変わればクマの種類だけでなく、クマへの意識や（クマを街に出さない対策は共通ですが）出没する風土の微妙な違いを実感しました。そして、それぞれの地域に根ざした普及啓発が重要だと思いました。大阪はクマと直接的に関わる人が少ない地域で、クマ問題を自分事として捉えるのはなかなか難しいと考えられます。そんな中でクマとの共存を考える人を増やすために「何を」「どのような」メッセージとして発信していくかを話し合いましたが、時間内に明確な答えは出ませんでした。そして、これは今後も我々が悩む課題であり続けるべきでしょう。

　最後に、参加者アンケートの集計をしていて、トランクキットの存在や中身があまり知られていないと感じました。ですので、トランクキットの周知を進めることも重要だと感じました。アーバンベアプロジェクトや今号の特集がその一助になれば嬉しい限りです。

「クマにかかわる普及啓発を実践する人材育成ワークショップin関西地区」
日時：2022年9月23日（金）
場所：大阪府大阪市　エマ梅田
参加者：9名

視点の違いを考慮した普及啓発の実践
清水 あゆみさん

私の活動地域は、クマが非常に身近です。基本的に、人身被害が出ている地域でクマが好きな人は珍しく、「害がないならいても良い」という扱いになりがちです。そういった地域でクマの話をする時は、具体的な対策に紐づく情報が中心になり、魅力について語ることは多くありません。よって、私がワークショップ時に所属した農村視点班のレクチャー案は実用的な対策重視の構成になっていたのですが、市街地視点の班はクマの魅力を伝える視点でのレクチャー案だったため、視点の違いがあるという前提を認識できました。

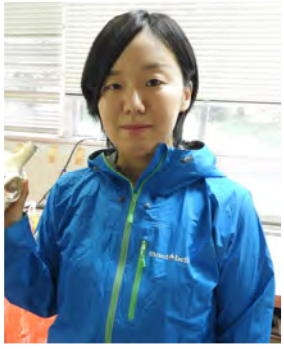
この視点差のことを考えると、被害対策に従事している人とそうでない人が混在する地域では、具体的な対策の話はどの程度求められるのだろうか、と悩みました。この辺りの采配は開催地域によって変わる部分のように思えますので、情報の配分について本格的に検討するなら、事前の打ち合わせ等が必要になると思いました。

普及啓発の人材育成という観点においては、ぶつけ本番でのレクチャーや、自身の知識面に懸念を持つ参加者が多かったように思います。人材育成の一環として、レクチャーの例を見られる動画の作成や、質疑応答が発生した際に備える支援メンバーの配置など、育成のためのフォローについては検討の余地があると思いました。

需要に応じる為にはあらゆる模索が今後も必要かと思いますが、今回のような試みが今後も続くことを願います。

「アーバンベア問題を自分事として考えるための野外ワークショップ in 富山」
日時：2021年11月13日（土）9:00～17:30
場所：富山県内（実際のクマ出没地点）
参加者：13名

公開シンポジウムを運営！



シンポジウムで様々な立場の人達と話題共有
秦 彩夏さん

プロジェクト最終年である今年、JBNとして初めてハイブリッド形式（オンライン＆オンサイト）でのでのシンポジウム開催を試みました。新型コロナウイルス感染拡大等を背景に、遠方にお住まいだったり、体調が優れない方でも気軽にご参加頂けるようにと考えてのチャレンジでしたが、実際の準備にはいくつものハードルがありました。オンライン配信環境の整備や会場設備の確認、両形式の参加登録者の管理、質問形式の検討･･･etc、同じく活動担当である長沼さんと課題の山を乗り越えながら、単一形式での開催の2倍以上の労力がかかることを痛感する日々でした。配信業者をはじめとした多くの方々のお力添えを頂きながらなんとか開催まで漕ぎ着け、無事終了した時には心底ホッとしたのを覚えています。蓋を開けてみると、居住地は北海道から鹿児島まで、年齢は10代以下から70代以上までと実に幅広い地域・世代の方々に参加登録を頂いていました。「もっとこうすればよかったな」と思う点も多々ありますが、地域と世代の垣根を越えて気軽に一つの話題を共有できるきっかけになったのであれば幸いと感じます。今後のシンポジウムの開催形式はさまざまな判断材料をもとに決定されることと思いますが、多くの方に話題をお届けする方法の試みとして多くの学びを得た活動のひとつでした。

「街に出るクマ～アーバンベアとどう付き合うか？わたしたちにできること～」
日時：2022年12月4日（日）13:00～16:00
場所：東京大学弥生講堂一条ホール＆オンラインのハイブリッド形式
参加者：191名（オンライン142名）

普及啓発動画を撮影！

適切な距離。ヒグマと人。人と人。

WoWキツネザルさん

私は環境系エンターテイナーとして、気候変動や生物多様性の保全についてワクワクしながら学べる動画や企画制作を行なっています。今回、JBN様にご依頼いただき、改めて「ヒグマとの共存」について深く考える機会となりました。

道外にいると北海道から報道されるヒグマのニュースはセンセーショナルで、人と自然の境界線があやふやになり、ヒグマとはとても危険な生き物だという印象に繋がりやすいです。そのあたりをフラットに見てみたいと思い、今回の企画で札幌に、そして別件で知床に行き、実際の被害やヒグマ対策の現場を見学しました。

現場で感じたことは、シンプルな「人とヒグマ」という問題ではなく、人だけでも「クマの近くに住む人」「現地で守りたい人」「遠くから守りたい人」「遠くから見ている人」など、様々なレイヤーの人がいるということです。そこで引き起こされている認識や感情の違いが獣害被害の解決を阻害しているように思いました。

そしてヒグマ問題を普及啓発するのは保全に理解度が高い人が多いため、現地の方々との意識の差が生まれがちになります。ヒグマと暮らす一般の方々のリアルな感情や生活の不安もしっかりと理解、共感した上で、対話のもと形成合意を取ることの大切さと難しさを身を以て感じました。

ありのままの自然が特別になってしまった今だからこそ、人だからこそ持ちうる『共感力』で課題を解決していきたいものですね。

「うんち探偵に密着！」に出演

後藤 優介さん

どうも。うんち探偵です(笑) これまで自称したことはありませんでしたが、成り行き上、そういう事になりました(苦笑)「クマのことを人に伝えたい！」そう思った時、私も含め、クマに関わる人たちは、ついついクマのことについて分かりやすく伝えることに努力を注ぎます。でも、今回の企画では、JBNの企画チームとWoWさんら制作スタッフのタッグのもと、まずはクマのことに無関心な人にも、広く興味を持ってもらい、裾野を広げた上で、最終的に多くの方にアーバンベアー問題を知ってもらう！という壮大な狙いが設定されました。そこで、第一弾として選ばれたテーマが、大人も子どももみんな大好きな「うんち」です。ロケ地は、私が勤務している茨城県自然博物館。ちょうどR5 年夏に開催するうんちの企画展にむけて準備の真っ最中であったことからも、白羽の矢が立ちました。博物館の強みはなんと言っても実物の標本があること。糞や剥製をずらりと並べてうんち研究室をしたて、野外施設も含めた撮影に挑みました。

撮影が始まると、うんちの魅力、うんちが語る自然のしくみの面白さを伝えたい気持ちが溢れ、あれもこれもとネタを提案してしまいます。でも、今回は何を採用し、どう味付けするかはWoWさんらに委ねることを意識しました。撮影中、ご本人が何度も口にされていたのが、楽しい！面白い！というお言葉。実体験をもとに伝えるというWoWさんのスタンスが人を惹きつけます。ただでさえ、目をひく出で立ちと、変幻自在の表情につられて、つい私も普段の5割増しのテンションとなりました。完成した動画を見ると、なるほど、そう編集するのか！と自分の発想では至らないであろう、新しい発見が数多くありました。自分が分かりやすいと思う事を伝えるのでは無く、相手が分かった、面白いと思える事を伝える。そんな発想の転換を体験した動画製作でした。

札幌のアーバンベアでドキュメンタリー挑戦

佐藤 喜和さん

皆さんこんにちは。JBNアーバンベアプロジェクト、WoWキツネザルさんとのコラボ動画撮影企画・札幌編のアシスタントディレクター（AD）の佐藤です。この企画について、いつ何をするのかよく知らないまま、札幌のヒグマ問題に関わる専門家としてコメントすればいいのだろうとに軽く考えていたのですが…代表でありながらJBNを甘く見ておりました。恐るべしJBN。

企画担当の稲垣プロデューサー（P）から協力依頼があったのが11月13日、協力しますよと即日返信、翌14日にはWoWキツネザルさんも交えての企画会議を行いました。なんとか雪の降る前に撮影を、ということになり、双方の都合がついたのがなんと翌週23-24日の2日間。急遽撮影場所の選定、撮影許可、インタビュー依頼などが始まり、気がつけば完全にAD役に。

あっという間に撮影当日を迎え、合流直後に大通公園地下駐車場でWoWさんのメイクと衣装替えの後、怒濤の2日間の撮影がスタート。やっぱり当日現地には行けません、ごめんなさい、という稲垣Pのメールを前日に受け、いよいよ現場アレンジはすべてADたる私の仕事と覚悟を決めます。出演者との待ち合わせ、押す撮影スケジュール、15時半には薄暗くなる11月の北海道。2日目の19時近くになんとか予定していたすべての撮影を終えると、WoWさんとディレクター兼カメラマンのお二人は、そのまま最終便で東京に戻られました。

企画決定から1週間後、丸2日間で撮影完了というスピード感は、やはりちょっと厳しかった。もう少し早く動きはじめていれば動物園での撮影もできたでしょうし、事前のロケハンもできただろうし、出演者に急遽撮影場所探しを手伝ってもらうこともなく、そもそも季節も夏場にできるとリアリティが増したでしょう。それでも限られた時間の中で、WoWさんとディレクター兼カメラマンのお二人は完成する動画のイメージを繰り返し確認共有しながら、カット割りやコメントの中身・声の調子などにまで気を配り、その場での撮り直しながら撮影を進める様子はとても真摯で、視聴者に伝えるということへのプロとしての強いこだわりを感じることができました。動画は現在編集中とのこと。完成した動画を見るのがいまから楽しみです。

札幌のアーバンベアに関しては、今回撮り切れていない部分もまだあります。続編を企画するなどして、再度一緒に動画をつくれるといいなぁ。そのときはAD役は誰かに譲ります。

WoWさんのYouTubeチャンネル
「WoWキツネザルの地球を救うアカデミー」

JBNのYouTubeチャンネル

アーバンベアプロジェクト３年間をふりかえって

2019年の秋、前の地球環境基金のプロジェクトである「四国のツキノワグマを守ろう！」の東京シンポの直後に、このプロジェクトの構想は始まりました。ちょうど2018年～2019年は各地で市街地出没が多発しました。当初は現場で何が起きているのか分からず、メディアの取材で状況を詳細に知るような状況でした。さらに私自身、普段は山の中で静かに暮らすクマとしか付き合ったことがなく、出没の現場で何が起きて、何が問題で、何をすれば解決に向かうのか、またどのようにこの問題に関わることがJBNらしさなのか、全くアイデアがありませんでした。そんな中、当時新潟でのクマ出没の勉強会を企画していた活動2の小坂井さん、日ごろから普及事業に熱い思いをもって進めていた活動3の中島さん、仕事柄各地のクマ事情に詳しい小林さんに引っ張られるような形で、突貫工事で申請書を作り上げ、そして2020年4月からプロジェクトが開始しました。

皆さんご存知の通り、コロナ禍とともに進んだプロジェクトでしたので、これまでの地球環境基金プロジェクトと異なり、みんなで定期的に会い、飲み、話し合うことが全くない中で各活動が個別に進行するという、これまでにない活動でした。

そのため、申請書の作成時から抱いてきた「これら4つの活動は本当に最終的に交わりあうのか？」という思いは活動の終盤まで消えることは無かったのですが、2022年12月のシンポでの各

発表を一参加者として聞いてみると、結果的にはうまく各活動が交わることでき、JBNらしいメッセージを発信できたように思えます。

私はこのプロジェクトの主要メンバーの中で最も現場から遠い人間の一人です。そのため各現場の最前線で活動されている方々が、どんな熱い思いをもってクマと住民に接しているのかなど、本当にたくさんのことを学びました。

これまであまりこういった活動に参加されてこなかった会員の方にも参加していただくという、これまでのJBNの活動とはまた違った姿の活動となりました。今回の活動はこれからのJBNの活動の広がりの可能性を大きく示すものになったと思います。25年目を迎えるJBNの歴史の長さと、また順調に会員数を伸ばし、ひと昔では考えられないような会員層の厚さになった今のJBNの姿に、自分も年取ったなと思いつつ活動を終えたいと思います。

プロジェクト代表　小池伸介

活動便り 地球環境基金

四国のクマの保全（＝個体数を増やす）を地域の方々にどう理解してもらえるか。四国のツキノワグマ保全プロジェクトでは「地域もクマも守る！四国の社会イノベーションプロジェクト」と題して、地域とクマが共生するための社会基盤を構築することを目標として活動を進めてきました。有難いことに、四国内外の様々な方々と連携する機会に恵まれ、クマ保全を通じた地域活性化（地域もクマも守る！）への道筋が見えてきた3年間になったかと思います。日本自然保護協会のバックアップのもと、全国に向けた情情報発信が強化され、保全に関心のある方々を巻き込みやすい環境が整えられたことも効果的であったと感じています。

今年度は活動最終年ということで、四国のクマの活動はまだまだ続きますが、ひとまず今回は、当プロジェクトに関わっていただいた方々に、感想や今後の展望についてお話いただきました。活動成果をまとめた報告書は鋭意作成中ですので、もう暫くお待ちください。

最後になりましたが、当プロジェクトへご支援、ご協力いただいた皆様に、この場を借りして心よりお礼を申し上げます。この保全活動をより一層確かなものとするべく活動を続けていきますので、引き続き当プロジェクトに注目していただければ幸いです。

（四国自然史科学研究センター・安藤）

昨年12/10に開催したシンポジウムでもプロジェクト概要をご覧いただけます！
【シンポジウム要旨集】

ダイジェスト活動報告

活動1）地域との対話：正しい知識の普及 地域との信頼関係構築 ➡ 地域に向けて四国のクマの生息状況や生態情報を発信！地域の施設と連携したイベント・情報発信を実施！

活動2）軋轢の予防措置：農林業被害の防止 実施と普及 ➡ クマの生息地・那賀町木頭地区の３名の養蜂家と共に電気柵を使った被害対策を実施！

活動3）保護区拡大の推進：新たな生息確認地域 保護区拡大の推進 ➡ 年２回の一斉調査を実施！ / 新たな地域で恒常的な生息を確認！

活動4）地域の利益：地域特性×クマを活用した市場の開拓 ➡ 四国のツキノワグマ痕跡ツアーを開催！ / Island Bear Friendly プロダクトを制作・販売！

クマの生息地の那賀町木頭と連携して情報発信！

那賀町木頭図書館～「クマの図書館」を目指して～

玄番 真紀子さん

那賀町木頭図書館は、山間僻地に文化の拠点を築きたいという先人たちの熱意により設立され、同時に地域のコミュニティの核としとしての役割を果たしてきました。町は過疎化や業の衰退など他の中山間地同様の課題を抱えていますが、四国で絶滅危惧されるツキノワグマが生息しているという特異な点があります。ここにきていよいよ人口減少と山の荒廃の危機迫る中、生態系トップのツキノワグマ生息域に最も近い公共図書館として発信できることがあるのではないかと考えました。

四国自然史科学研究センター安藤さんのお声掛けにより、2022年12月10日に開催した第1回「木頭クマ祭り2022」は、木頭図書館としても初めての大きなイベントでしたが、ツキノワグマ保護活動のパネルや実物の展示、専門家と地域住民との意見交換などに子どもから大人まで多くの方が足を運んでくださいました。人口1000人足らずの地域に町内外から300人以上集まり、予想以上の反響に驚いたものです。

地元ではツキノワグマについて関心のある方はまだ少なく、まずは知ってもらうための情報発信が必要です。そこから考えることは山の環境であったり、ヒトと動物との関係であったり。大きな問題だと思うことも、各々が自分の身に引き寄せて考えることで理想の未来に一歩一歩近づけるのではないかと考えます。

今後も多様な活動や団体と連携し、公共図書館という機能と場をもってできる精一杯のことをしていけたらと思っています。第2回「木頭クマ祭り」開催、エコツアー、クマの絵本づくり、学校との連携など、地元の協力者を増やしながら、柔軟に広く繋がって実現してきたいものです。

木頭小学校ふるさと学習でクマについて学ぶ！

木頭学園５・６年生担任　四国のクマを学習テーマに設定

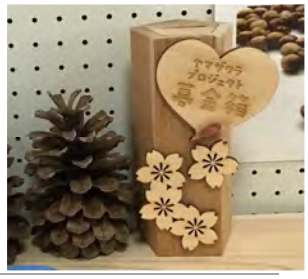
水口 裕一さん

ふるさとに誇りをもち、大切に思う心を育むためにはどのような学習をすればよいのだろうか。

５・６年生の児童は、１～４年生のときに「ふるさと学習」で地域の観光名所や木頭ゆずについて学んできた。今年度は、さらに広い視野で地元である木頭のよさや課題について学んでほしいとい考えていた。昨年度の振り返りをもとに児童と話し合い、今年度の「ふるさと学習」は、木頭の山と深い関わりのある四国のツキノワグマについて調べることにした。四国のツキノワグマに詳しい地域の方々の協力を得て、学習を進めた。四国のツキノワグマの生態や生息状況、絶滅から守るための取り組みなど、体験を通して学ぶこともできた。また、調べていく中で木頭のシンボルである木頭杉との関わりや土砂災害、河川の増水など、自然とのつながりを知ると同時に木頭の課題を見つけ、木頭の未来を考えるきっかけとなった。

この学習を通して、ツキノワグマを守るということは、木頭の自然を守ること、さらには、人と動物が共存することのできる世界になるということを知り、自分たちにできる取組をしようという意欲が見られるようになった。

子どもたちの発案により、木頭図書館にツキノワグマを支援するための募金箱が設置された。これは、ふるさと木頭を愛する第一歩だと私は思う。



ドキュメンタリー映像を制作・公開！

「熊と人 四国の森に生きる」を制作、全国ケーブルテレビで253回放送

宍戸 大裕さん

絶滅の危機にある四国の熊のためできることはないか。拙作の映画上映会のため高知へ招かれた折、四国自然史科学研究センターを訪ね山田孝樹さんに相談したところ活動紹介の映像を撮らせてもらえることになった。2020年と21年、計11日間にわたって密着取材させていただいた。

自然や動物をまもりたいと思う時、いつも人間の「理解」を得ることが必要になる。山田さんや安藤喬平さんが丁寧に地域に溶けこみ重ねてきた活動は、土地のひとから深い信頼をえていた。

熊に惹かれたひとは、ときに「隠れキリシタン」のように見える。熊に魅せられその素晴らしさ、貴さをこころから知ってもらいたいと思っているけれど、世間の熊に対するイメージは「怖い」「危険」と惨憺たるものだ。熊への思いは募らせていても、いつか言動は慎重になり、相手の警戒感にあわせた話し方を身につけていく（同じ思いをもつ人のいる場を除いては）。その禁欲的な姿勢が物足りなく感じ、もう一歩前に出てほしいと思うこともあるけれど、世間を相手にする以上やっぱり歩みはゆっくりになる。人間の「理解」を待っている間にも熊は絶滅してしまうのではと焦慮する。

生きものを殺して食べるのに、熊がふえれば殺し、減れば保護しようとする。人間は謎めいている。

映像は
こちらから！
（YouTube）

ニホンミツバチの養蜂被害対策を実施！

養蜂被害を防ぎクマと共存の道を模索

林 杉夫さん （インタビュアー：安藤喬平）

クマの被害

20年くらい前にニホンミツバチの養蜂を始めた頃はクマの被害は全くなく、クマを気にすることはなかった。最初にニホンミツバチの養蜂被害があったのは今から7～8年前。林道の奥に置いたミツドウ（養蜂箱）をひっくり返されて中の巣を食べられていた。最初にやられたときはびっくりした。その時は全部食べられてなかったが、その次にやられたときには全部食べられていた。最初は警戒心があったのかもしれない。それから同じ場所やその周りで毎年被害に遭うようになった。５年くらい前に、一カ所にまとめて置いていた７個のミツドウが全てやられてしまい、その林道に置いていた他のミツドウもほとんどやられてしまった。木頭では私ばかりがやられていて、これまでに30個は被害にあっている。ミツドウ１個で少なくても４升の蜂蜜が取れるので、損失は200万円くらいになるのではないか。あまりにも被害が酷かったので、それは怒った。

どこにも取り合ってもらえない

何回かやられた頃に四国自然史科学研究センターや環境省の地方事務所に電話をした。徳島県にも電話をしたが、どこも全然取り合ってくれなかった。「クマと人間とどっちが大事なんだ」と言うと、「クマの方が大事」と言われた。県の職員が被害現場を見に来たこともあったが、ミツドウを置くのが悪いということを言われた。「クマがミツドウに惹かれて出てくる。ミツドウさえなければ」ということだった。

独自でクマ対策を行うも…

ミツドウを置く場所にクマが登れないように細工したり、クマが来たら一斗缶が落ちる仕組みを作ったりして対策をした。最初の1年は効果があったが、翌年には攻略された。光を発して脅かすやつは全く効果がなかった。クマが来ない林道の入り口に場所を移してみたりもしたが、今度は人に盗まれてしまった。

電柵を使った対策

電柵は確かに効果がある。電柵を使えば前はやられてしまっていた場所でもクマは逃げてやられなくなった。しかし、子供を連れたクマが何度も来て、結局地面を掘られて突破されてしまった場所もあり、山の中では電柵でも効かないところもある。もっと地面が固いところを選んだり、二重柵にすればよいのだろう。一番は、クマの手が届かない場所に置くのがよいと思う。しかし山の中にはそうした場所はなかなかない。

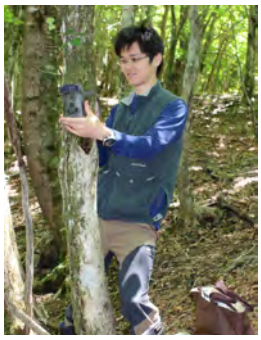
ニホンミツバチがいなくなった

クマの対策を始めた矢先にニホンミツバチに病気が蔓延し、木頭からはほとんどいなくなってしまった。クマにやられた場所も電柵を続けていれば守れていただろうから、もうちょっと続けたかった。

今後に向けて

クマ被害はもう諦めた（笑）。クマがいるからこそここが有名になっている。これからやるならクマに取られない場所に置くか電柵を使うかしていくしかない。ミツバチの病気もそろそろ過ぎたような予感がする。

恒常的な生息地の拡大を確認！



一斉調査を指揮・運営
山田 孝樹さん

JBNとNACS-Jとの協働による保全プロジェクトは2017年から始まり、6年が経過しました。多くの方に協力をいただいたことで、これまで実施が難しかった活動を実施することができました。本プロジェクトにご協力してくださった皆様に心より御礼申し上げます。

四国自然史科学研究センターとして実施してきたこれまでの調査では、分布の中心地域で活動することが多かったのですが、今回は自分も初めて訪れる場所も多く、新鮮な気持ちで調査をすることができました。また、調査には多くの方に参加していただき、そうした人達と宿泊施設や調査中などに四国のクマの話をじっくりとすることができたことは、個人的にとても嬉しく、今後に向けた大きな力となりました。

活動３では、新たに生息が確認できた地域で引き続き、複数のツキノワグマが確認され安定的な生息地であることが確認されました。そうした結果を関係機関と共有し、国有林の一部地域では生物多様性という文脈の中でツキノワグマに配慮した林業施業を進めていけるよう関係者と検討をしています。

その他の活動でも多くの良い結果を得ることができました。それらの結果をより大きな成果に変え、プロジェクトの最終的な目的でもある四国のツキノワグマの保全を達成できるよう、今後も活動を続けていきたいと思います。今後とも、ご支援・ご協力をよろしくお願いします。

春秋の一斉調査に馳せ参じてくれた人々！

毎年調査に参加

中川 恒祐さん

JBNが四国プロジェクトに関わりだしてから、6年が過ぎようとしています。四国のツキノワグマの置かれた状況について危機感はあっても、具体的なアクションに結び付けるのは相当なハードルが存在します。幸いなことに、一斉調査が実施されてきたおかげで、私も毎年調査に参加し、微力ながら四国のクマのために活動することができました。

四国自然史科学研究センターが中心となったこの3年間は地域の人たちを巻き込むことを重視し、一斉調査にも様々な立場の人たちが参加してきました。例えば地元の会社の人、地域で活動する写真家、バックアップをしている機関の関係者、研究者、行政関係者、学生などです。調査の結果も当然重要ですが、四国のクマの現状を知ってもらう機会となった点が一斉調査の大きな意義だったと感じています。懇親会の際には、色々な人たちの考えや生き方に触れるとともに貴重な話を聞くことができました。調査を含めて大変楽しい時間でした。今回の活動が周知されることで、四国のツキノワグマの現状や将来について少なくともクマや自然に興味のある人の心に刺さる部分があったのではないかと思います。行政の背中を押すには市民の声が重要であることから、今後も活動を継続し、広く情報を発信することが大切だと感じます。と、参加だけする側の気楽さで書いてしまいましたが、調査を運営した皆さんは大変な作業だったと思います。改めてお疲れ様でした。

地元で古民家ゲストハウスを営む

桑高 仁志さん

桑高さんが運営する
ゲストハウス杉の子のHP

徳島県那賀町木沢で古民家宿「ゲストハウス杉の子」を運営しています。那賀町には約10年前『地域おこし協力隊』として移住、高齢化の進んだ木沢でおばあちゃんたちの生きがいづくりや大学生交流などに取り組んできました。

2018年那賀町で大規模風力発電が計画され、そこで初めて四国ツキノワグマの生息を知りました。今まで自分自身が無関心だったことをはじめ、事業者の資料公開姿勢とほとんど興味を示さない住民の多さに大きなショックを受けました。勉強会を企画する中で『この地域のアンブレラ種は四国ツキノワグマ』だと改めて知り、知人の紹介で四国ツキノワグマ一斉調査に計３回参加させて頂きました。

ほぼ山歩きをしたことがない初心者でしたので、当初は初級者エリアにして頂きました。全国各地からの参加者はクマ愛溢れる方々で、本当に毎回楽しかったです。見たことのない美しい新緑と紅葉の景色、クマの暮らす森を歩くことで「自然植生の大切さ」「ツキノワグマ問題」をより身近に感じる事が出来ました。

クマの暮らせる環境、森が少ないことが問題であると感じます。世間一般的には怖いイメージが先行しがちなツキノワグマですが、私は調査活動を通して身近な友人のように感じることができました。クマが暮らせる森がある＝豊かな森が地元徳島の那賀町に残っている。私はそんな地元を誇りに思います。あの森の美しさ・クマの可愛らしさをより多くの人に知って欲しい。今後は宿業をより活かし、情報発信やエコツアーなど国内外向けに提供していきたいと思います。

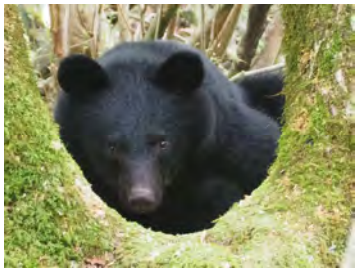
Island Bear Friendlyロゴを使った製品販売！

山の家と四国自然史科学研究センターと四国のクマさん

中野 久さん

15年前から奥槍戸山の家の管理人をしています。木の名前、花の名前、動物の名前はほとんど知りませんでした（今も詳しくはありません笑）。そんな僕も四国自然史科学研究センターの方々のお陰で少しずつ興味を持つようになりました。その中で最近最も興味深いのが四国のクマさん（ツキノワグマ）です。このあたりに生息している事は地元のおじさん達に聞いたこともあり知っていましたが、見たことはなく実感がありませんでした。

令和4年8月5日、山の家への出勤途中に、家族で「クマさん、クマさんどこですか？」と歌いながらカーブを曲がったその時、黒い物体が動いているのを見つけました。いつものカモシカかなと思いましたが、いやいや違いました。クマさんではありませんか！家族で一緒に見ることができ、嬉しい体験でしたが、違和感を感じました。熊は全く逃げようとせず、人慣れしているようでした。少し前にバイクのライダーさんが「クマがいたからクリームパンをあげたけど逃げた」と話していたのを思い出し、まさかと思いますがエサをもらえると思ってしまったのでしょうか。それから暫くは頻繁にその個体が山の家周辺に姿を現しました。原因は分かりませんが、いくら可愛く思ってもどうかエサは与えないようにお願いします。僕ももっと熊さんのことを教えてもらい、どう対処すべきかを勉強していきたいと思います。自然史科学研究センターさんこれからも仲良くしてください。



クマの生息地でエコツアーを開催！

四国にクマが生息している

水沼 佑太さん

水沼さんが主宰する
OMUSUBI HIKEのHP

四国を中心に登山ガイドとして活動しています。これからも多くの人や生き物と出会っていくことでしょう。

昨年の秋に四国に住むクマの痕跡を探るエコツアーを実施しました。四国のクマが絶滅するかもしれないということを聞き、焦りから始めました。絶景や花を楽しむ登山ではなく、「事実を知る」を主に、生きる証を僅かでも見ることができれば、暮らしの雰囲気を感じることができれば、次なる進む道が見えてくると思い企画しました。

まず那賀町木頭を訪ねると滝と川の美しさに魅せられ足を止められました。森が溶けたようなあの色は美しい。朝の河辺、狭い空が広く感じる霧と朝日を見てシャッターのように目を閉じました。ツアーの前後にここを歩くだけでも落ち着きます。１回目のツアーは台風接近の為、中止。再募集し、登山道を歩きながら痕跡を2箇所訪ねました。参加者一同真剣に目を見張り「ここにいたのかー」と確認しました。辺りは真っ白い霧に覆われて眺望もなし。風も強く声が聞こえないほど吹いていましたが、クマ住む環境を身体全体で知ることができました。最後にカメラトラップを回収し確認したところ、数多くの鳥や動物と共に数少ない四国のツキノワグマも映っていました！ここは楽園だと確信。１週間の時間のずれですが同じ場所に立つことができ嬉しいです。これも多くのできごとが重なって見れたものです。この感動を地元の方や四国に住む人と共有できることを期待し、引き続きエコツアーを開催していきます。

四国ツキノワグマプロジェクト３年間をふりかえって

JBN四国ツキノワグマワーキング・グループ座長
亀谷 明子さん

2017年度から2019年度にJBN、NPO四国自然史科学研究センター（SINH）、（公財）日本自然保護協会（NACS-J)の連携で取り組んだ「四国のツキノワグマを守れ！50年度に100頭プロジェクト」では、四国のツキノワグマの生息状況、四国の人々の意識、現状の打開策について調査・整理し、普及啓発を行いました。ここで見えてきた課題はクマの個体数を増やすための行政によるトップダウン型の取組みと、地域のクマの許容度を高めるための地域連携によるボトムアップ型の取組みの必要性でした。

そこで2020年度から2022年度の3年間はSINHが中心となり「地域もクマも守る～四国の社会イノベーションプロジェクト」として、那賀町木頭周辺を中心にボトムアップ型の取組みを中心に展開することとなりました。

一年目は新型コロナウイルス拡大に伴う行動制限などで私自身は四国へ行くことできず、コアメンバーとはオンラインで打合せを行う状況が続き、活動に貢献できないもどかしさがありました。そんな中でもSINHの安藤さん、山田さんは地域に脚を運び、本プロジェクトへの協力者を少しずつ増やしながら調査や被害防除、普及啓発活動を広げてくれていました。

そして二年目の2021年12月に徳島県那賀町の木頭図書館でシンポジウムを開催。感染防止のため登壇者のみ集まりYouTube配信を行う形となりましたが、クマの生息地域でクマと地域の未来について話し合い、発信できたことは大きな一歩となりました。ディスカッションの最後でWood Headの西田さんが「クマを利用して地域を盛り上げたい。来年は木頭でクマ祭りを開催し、町外から多くの人に来てもらいたい」と語った時はとても嬉しく、一筋の光が見えた気がしました。

三年目となる2022年12月、念願の木頭クマ祭り＆シンポジウムの開催が実現。これまで本プロジェクトに関わった地域の人々、図書館、山小屋、コンビニ、行政関係者、大学等が集まり、町内外からの参加者は300人となりました。地元名物を販売するブースも盛況で売上げも好調でした。イベントの最後にはくじ引き大会を行い、大いに盛り上がりました。地域住民からは「クマでこんなに人が集まるんだ」「たくさん来てくれてよかった、すごかった、とにかく楽しかった、来年もまた」といった声が聞かれるなど、好評だったようです。

今回のイベントを通して、クマ保全が地域のメリットになる形を模索していきたい、という想いが、イベント参加者や行政関係者に伝わった手応えがありました。NACS-Jや西田さんの尽力によりモンベル会長や徳島県知事の招聘が実現し、シンポジウムの注目度も上がり、将来的なモンベルとの連携の可能性も出てきました。

木頭クマ祭り＆シンポジウムは3年間のプロジェクトの集大成となりました。一個人や一団体だけでやれることは限られますが、多様な主体が得意分野を活かして連携することで、大きな力になることを体現できたと思います。今後も「木頭クマ祭り」が毎年開催され、地域のお祭りとして定着していってほしいと思います。将来的に実行委員会化して祭りに関わる主体を増やし、クマを軸に様々な人達がつながるプラットフォームを構築することができれば、「地域資源：ヒト・モノ・コト」と「ツキノワグマ」を掛合わせた新たな価値の創造につながっていくと考えています。

IHBCW2022（国際クマ会議ネバタ州タホ湖大会）トラベルグランツ採択者 参加報告

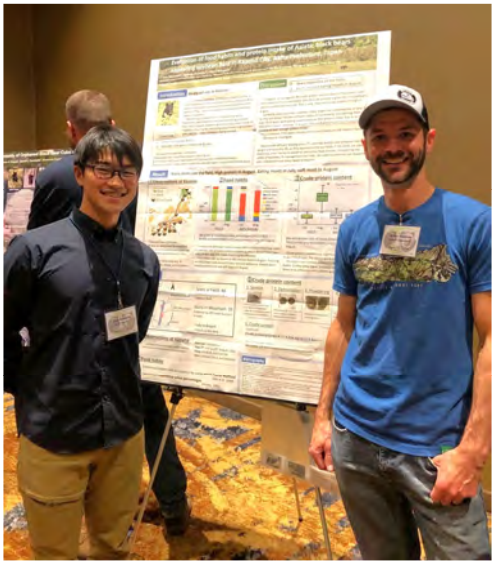
2022年10月16日から20日にアメリカネバダ州タホ湖で催されたThe 6th International Human-Bear Conflicts Workshopに参加した渡邉さんから会議の様子を報告していただきます。

渡邉 颯太（岩手大学大学院 総合研究科 地域創生専攻）

JBNの皆様こんにちは。岩手大学大学院修士課程1年の渡邉颯太です。今回JBNのIBA学生参加支援金を頂いて、国際クマ会議（以下：ワークショップ）にポスター参加させて頂きましたので、その報告を申し上げます。

ワークショップでは世界に８種生息しているクマのうち、マレーグマとジャイアントパンダを除く６種のクマの発表がありました。開催地が北米のためか、アメリカクロクマ、ヒグマ、ホッキョクグマを対象とした研究が多かったです。Conflicts（：対立）ワークショップということで、内容はクマと共存するための知見・技術・問題点の共有、個体群管理、普及啓発、アーバンベア対策などに関するものが主でした。

私は北奥羽山地の一角において、大豆畑に依存しているツキノワグマの特殊な食性と軋轢について発表しました。草木が固くなり食物が減る夏には、北奥羽のクマはアリなどの昆虫を主に食べるようになります。一方で大豆畑のクマは畑と山の両方を利用しており、畑の枝豆を食べる時期のみ、山では昆虫よりも液果を利用するようになっていることがわかりました。さらに、枝豆を食べることで山のクマよりも2～3倍多いタンパク質を摂取していました。既往研究から、クマが目標量のタンパク質摂取を第一に優先していることを踏まえると、この地域のクマは人間の大豆畑に依存することにより、山での食生活をも変化させていることが示唆されました。さらにこうした依存に伴って起きている農業、畜産業そして心理的な被害をまとめ、考察しました。発表に対して様々な意見と指摘を頂きましたが、特に印象に残ったのは「クマの楽園だから管理人を置いてレクリエーション化し、資金を集めて適切なコントロールを行うのが良い」という提案です。例として説明されたノースカロライナ州にあるアリゲーターリバー国立野生動物保護区には、アメリカ南東部で最大のアメリカクロクマ個体群が生息しています。この個体群は保護区による狩猟制限と、大豆を含むいくつかの農作物を自由に食べられる環境によって維持されています。さらにスタッフによってガイド付き野生動物ツアーが企画され、保護区の維持費などが賄われるそうです。安易に実施できない提案ですが、北米の方々の斬新な発想とそれを裏付ける実例があることに衝撃を受けました。



練習したので発表を伝えることは出来たのですが、質問がわからず翻訳機が手放せませんでした。紙とペン、PC、身振り手振りが役に立ちました。一緒に写っているAJさんにはとてもお世話になりました。

食事とお酒を楽しみながら様々な方と交流できました。論文で拝見した方にお会いできたり、出資企業のブースで見学したりと充実した時間を過ごしました。tako barという立食タコスバイキングが出ましたが、唯一のアジア料理であるキムチは具として人気がないようでした。

ワークショップの翌日、たくさんの方のご厚意（と僕の必死の懇願）により、ネバダ州でアーバンベア対策に取り組んでおられるToogee Sielschさんにタホ湖のフィールドを案内していただきました。タホ湖のアメリカクロクマは都市内に張り巡らされた大型排水パイプを使って移動し、ゴミを大量に食べ、人家の床下や空き家、住宅街の藪などを隠れ家・冬眠穴として日常的に使っています。ところが人身事故はめったに起きません。アメリカクロクマの気性が比較的穏やかであるのも理由の一つでしょうが、そもそも人に慣れていること、下層植生が少なく林の見通しが良いこと、そして住民のクマへの関心が高く対処法が浸透していることがあると思います。スーパーの土産物コーナーはクマグッズで溢れていましたし、ホテルのフロント係はクマについて熱弁してくれました。タホ湖の人々はクマを身近に感じ、愛しているのがよくわかりました。

現在、日本各地でもアーバンベア問題が取り沙汰されています。今回のワークショップで、タホ湖の様子は日本のツキノワグマの行き先の一つなのかも知れないと感じました。適切な距離感を保ち、クマと人が妥協し合いながらも豊かに暮らせる社会になれば、そして僕もその社会づくりを担えたらと思います。

最後に、貴重な経験をさせていただいたJBNの皆様と支援金制度に感謝致します。本当にありがとうございました。

一日中案内して頂いたのですが、クマは観察できませんでした。しかしNational Geographic誌(2022年7月号)に掲載されたクマの棲む家を見学したり、US国有林レンジャーと深い話をさせて頂いたりしてとても実りある時間を過ごしました。（Toogeeさんは右側の男性）

左側のアパートにはそれぞれ人が住んでおり、窓ごしに世間話をしたりしました。しかし右側にある藪の根元にはしっかりとクマの寝床が確認でき、いかにクマと人の距離が近いかを実感しました。

研究 クマ通信れぽ 34

ツキノワグマ（以下、クマ）が人里に出没する可能性を春に予測できないか？ ブナ林が広がる日本海側の豪雪地帯において、15年間にわたるブナ開花量モニタリングに基づき検証した研究を紹介します。

春、ブナの「花見」でクマ出没を予測する

信州大学・森林生態学研究室
井田 秀行

クマ出没注意報を早く出すために

人里へのクマ出没が各地で顕在化した今日、ブナの実やナラ類のドングリが凶作のとき（つまり秋の主食が少ないとき）にクマが出没しやすいと住民に対する注意喚起が多くの自治体でなされています。実際にブナの実が凶作の年、秋にクマが大量出没する傾向があることは今回の調査地でも明らかです（図1）。ところが、たいていの場合、凶作の確認がされて注意を促される頃には、すでにクマが出没しているのが実状です。これは夏以降に豊作や凶作といった作柄が判断されているからと考えられます。地域住民からすればクマ出没の注意喚起は少しでも早い方がよいはず。そこで私は、夏より前の、春の花の段階でそれができないか検証してみました。

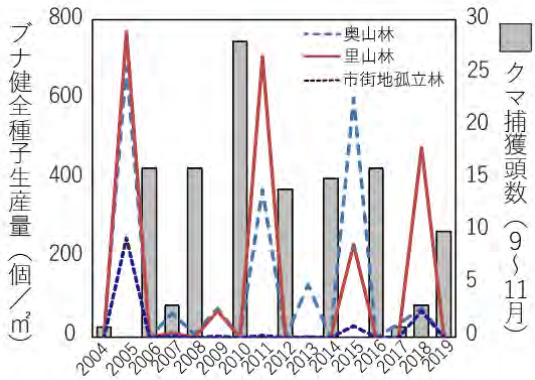


図1.ブナ凶作年の秋にクマは多く出没。折れ線はブナの健全種子生産量を表す。折れ線の値が低い時、秋のクマの捕獲頭数（灰色バー）が著しく高くなっていることが分かる。

ブナの雄花に着目

ブナは春に花を咲かせます（写真1）。雌花（厳密には雌花序）の付け根からポンポン（チアチームの定番アイテム）のようにぶら下がって付く雄花（厳密には雄花序）は、花粉を飛ばした後、初夏にはほぼ全て落下します。風媒花なので花弁はなく、大量に開花してもそれほど目立ちません。今回は、こうした雄花の生産量（落下数）の多い少ないでクマの出没可能性を春の段階で予測できるかどうか検証することが目的です。

雄花に着目した理由は2つあります。1つは、雄花数と健全種子数の間には強い正の相関があること（雄花が多ければ健全種子も多い）。もう１つは、健全種子は秋を待たないと正確な量が分かりません（実の豊凶は秋まで分からない）が、咲いて間もなく落下する雄花であれば遅くとも夏までに年間生産量が分かるからです。つまり雄花は、種子の豊凶とともにクマの出没傾向をも予測する強力なツールとなり得るのではないか、と考えたのです。

写真1.春に咲くブナの花。

雪国のクマはブナが大好物

調査対象地とした長野県飯山市は最深積雪2～3mの豪雪中山間地域。標高域は約300～1290m、面積約200㎢のうちブナ林が1/4程度で、ブナが

混じるナラ林等の落葉広葉樹林も1/4程度を占めています。そして、高脂質･高タンパクであるブナの実（種子）の成り年がだいたい2～3年ごとに訪れる当地域（井田ほか2017）では、それがクマの重要な食物となっていると考えられます。

シンプルなモニタリング

私は2000年頃から、同市内のブナ成熟林3地点においてブナの花および種子生産量を継続的にモニタリングしています。具体的には、奥山林、里山林、市街地孤立林のそれぞれに種子トラップを5～6個設置し、落下物を数週間～数ヶ月毎に回収します。そして、落下物からブナの雄花、健全種子、不健全種子（未熟・しいな・虫害・鳥獣害・菌害）を選別しカウントする、というものです。今回用いたのは15年間（2004～2019年）のデータで、同期間に対応するクマ出没数には、飯山市内で有害捕獲された頭数を用いました。

ブナの花とクマ出没の関係

ブナの年間の雄花生産量と季節別のクマ有害捕獲数との関係を、5～7月（ブナ開花期）、8月（ブナ種子発達期）、9～11月（ブナ種子落下期）のそれぞれについて統計モデル[1)]を用いて検証しました。結果、雄花生産量と5～7月の捕獲数との間にははっきりとした関係は認められず、雄花と8月および9～11月の捕獲数との間にはいずれも強い負の関係があることが示されました（図2）。これらのことから、7月までの出没を雄花の量で予測することは難しいものの、8月以降、特に9～11月の出没可能性は雄花の生産量が少ないほど高まると予測できそうです。

誰でもできるブナの花見

今回の例は種子トラップに落下した雄花序をカウントしていますが、ブナの雄花の量を定性的（大まか）に捉えるならば簡単です。4月下旬～6月上旬（立地条件によります）にブナ林内を歩き回り、「落下した」雄花がほとんど見つからなければ（たいてい凶作なので）夏以降のクマ出没可能性は高く、逆に、大量に確認できれば（豊作になる可能性があるので）出没可能性は高くないと考えられます。もちろん実際には相当広範囲に歩き回る必要があります。雄花は落下後1～2週間も経てば土に混じって分解も早く進むので観察時期も重要ですが、特に日本海側の雪国のようにブナ純林が多い地域ならば、専門家でなくともこの方法を用いてクマ大量出没を早めに「感じとる」ことができるのではないかと思います。

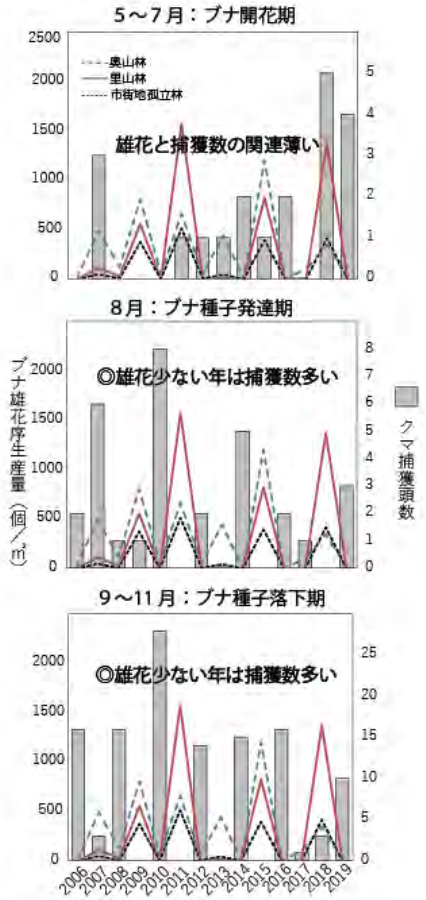


図2.ブナ雄花が少ない年は8月以降、クマ捕獲頭数が多い。ブナ雄花花序生産量（折れ線）とクマの捕獲頭数（灰色バー）の関係は8月以降に明瞭になる。

1）クマ捕獲数を応答変数、雄花数と前年の健全種子数を説明変数、地点をランダム効果とした一般化線形混合モデルを構築し、最適モデルを選択した。確率分布はポアソン分布。

もう少し詳しく知りたい方はこちら

- ✓ 井田秀行･竹内祥恵･高崎禎子 (2017) 豪雪中山間地におけるブナ堅果の生産量と成分特性からみた特産物としての有用性. 日本森林学会誌, 99: 10-17
- ✓ Ida, H. (2021) A 15-year study on the relationship between beech (*Fagus crenata*) reproductive-organ production and the numbers of nuisance Japanese black bears (*Ursus thibetanus japonicus*) killed in a snowy rural region in central Japan. Landscape and Ecological Engineering, 17: 507-514

JBN Cubs

今号のcubsでは、クマの調査研究を行う学生に、今年度の活動についてインタビューしました。

今回はクマを調査している団体がどんな活動をしているのかJBN会員の皆さんに知ってもらうべく、岩手大学ツキノワグマ研究会、東京農工大学森林生物保全学研究室、酪農学園大学野生動物生態学研究室所属の３人に今年の活動内容についてお聞きしました！
質問は次の３つです。

Q
1：所属する組織での活動内容を教えてください。
2：今年度一番印象に残っていることは何ですか？
3：来年度に向けての抱負をお願いします。

滝川あかりさん（岩手大学 学部３年）

A1：岩手大学ツキノワグマ研究会は現在約25名を中心に、盛岡市猪去（いさり）地区の山々を踏査し、クマの生態を探るとともに地区の被害対策協力も行っています。
調査では、痕跡・食性調査（フン分析）、餌資源調査（シードトラップ法）を行っています。被害対策としては、年3回住民・行政職員・学生協働での草刈りや、リンゴ園周辺に自動撮影カメラを設置し、調査結果と動画を自治会へ報告しています。クマ好きに限らず様々な(変)人が集まり、各々のペースで自然を楽しみながら、交流や学びを行っているサークルです！

▲草刈りの様子

A2：世の中がwithコロナに馴染んだことで、県外の調査やイベントに多く参加できたことです。JBNシンポジウムへの現地参加や他にいくつか学会に参加したことで他大学の学生と話すことができ、刺激的な一年でした！

A3：昨年よりも山に入り、もっと体力と目を養いたいです！あとは卒論もありますが、野生動物に目覚めさせてくれたクマ研へ恩返しの意味も込め、クマ研の研究結果を外へ公表したいと思っています。今年もwildな一年に！

▲踏査の様子

牧野珠子さん（東京農工大学 学部３年）

A1：農工大の森林生物保全学研究室でクマ班に所属し、日光足尾山地で調査を行っています。捕獲罠の見回り・メンテナンス、捕獲したクマの体計測や首輪の装着・回収などを行い、得られたデータを活用して研究をしています。駆除個体の解剖のお手伝いや採取したフンの内容物の分析もしています。夏と秋に行う液果とドングリの結実調査では、普段の見回りよりも多くのメンバーが集うので、日中の調査も夜のご飯もすごく楽しかったです。

▲ミズナラの幹にあったクマの爪痕

A2：クマが直前まで居た場所へ行った痕跡調査です。四つん這いがやっとの長い崖を登りきると、そこは堅果フンの楽園でした。近くを通る足音に緊張しつつも、初めて動く野生のクマを目の前に興奮したことは忘れません。

A3：山をもっと上手く歩ける、崖でリュックを落としたりしない調査員になりたいです。後輩もできるので、作業、調査地、さらにクマ遭遇時の対処法もきちんと覚えて役立てるようにします。また山でクマに会いたいです。

▲捕獲したクマのサンプリングをしている様子

尾関新太さん（酪農学園大学 学部３年）

A1：私たち酪農学園大学野生動物生態学研究室は、札幌市、道東の浦幌町・白糠町にまたがる阿寒・白糠地域およびその周辺の市町村（陸別町、足寄（あしょろ）町、釧路市阿寒（あかん）町・音別（おんべつ）町）で木杭とカメラトラップを用いたヒグマの生態の調査を行っています。さらに今年は卒業論文のために、富良野市や八雲町、興部町でOB、OGの協力をいただき調査を行わせていただきました。

▲調査に出発する前のワンショット

A2：私自身、今年ゼミに配属されたということもあり、初めてのことだらけですべてが大変でした。地図読みやコンパスの使い方に慣れるまで、先輩たちについていくのに必死でした。今は先輩方のご指導のおかげで少しずつではありますが慣れてきました。

▲調査中に見つけたクマの足跡

A3：今年は4年生に進級し、調査を仕切る立場になるのでしっかり責任を持ってやっていきたいと思います。また卒業論文を書くことにもなるので自分のやりたい内容と卒業論文でできることを照らし合わせて考えていきたいと思います。

学生部会員で「私の団体についても紹介したい！」という方がいましたら、ぜひご連絡ください！
連絡先：bj@japanbear.org
※次号以降の掲載を予定しております。

学生部会よりお知らせ ～学生部会メーリス、登録されていますか？～

JBN学生部会では、JBN全体のメーリングリストとは別に学生部会員を対象としたメーリングリストを運営しております。学生会員として入会された方には招待メールをお送りしておりますが、参加できていない方もいらっしゃるようです。参加していない方で招待を希望する方は三枝（lutra-hironorius716@eis.hokudai.ac.jp）までご連絡ください。

くましごと

Vol.7 アーティスト編

「クマに関わるお仕事」ってどんなのがあるの？何をしているの？？気になるお仕事、紹介します！今回はアーティスト編として、写真家として活動されている二神さんとミュージシャンとして活動されているホラネロ・谷藤さん（オホーツク音楽工房）にお話を伺いました。

二神 慎之介さん
（自然写真家）

どのような活動をされていますか？

自然写真家として活動しています。ヒグマとツキノワグマをはじめとする日本国内の野生動物、また漁師さんなども撮影させていただいています。写真絵本や雑誌でその発表をしながら、アウトドアギアの広告写真や映像業界のスチール（写真担当）、ステージ撮影などの撮影もカメラマンとして請け負っています。

クマを追うようになったきっかけは、観光旅行でカラフトマスの遡上を見たことでした。カメラを持つ前は八重山諸島や南米等に通う南方志向だったのですが、マスの遡上観察のために道東に毎年通うようになりました。そこでヒグマが食べ散らかした痕跡を見つけて、興味を持つようになりました。

お仕事のやりがいを教えてください

足を使って、海岸から稜線まで、様々な状況下でクマの姿を見てきました。映像でよく目にする派手なシーンではなく、クマたちの普段のしぐさや生活こそがなかなか見られないことだし、伝えるべきものだと思っています。例えば、ハイマツの実をもぐもぐと食べるヒグマをしばらく眺めていられた時は、とても嬉しかったです。そのシーンに良い形で出会うまで5年程

ホラネロ　谷藤 万喜子さん
（ミュージシャン）

どのような活動をされていますか？

ホラネロはフルートとギターによる音楽ユニットです。宇多田ヒカルや大黒摩季、THE ALFEEなどの作品に携わってきた作編曲家・ギタリストの本田優一郎と、東京藝術大学大学院卒のフルート奏者の谷藤万喜子が「音で地域の魅力を発信」するために2012年から活動を始めました。ヒグマの骨笛や、流氷の鳴き音など、北海道ならではの音を使った音の特産品、“ジオミュージック”を考案。地元愛を育み、心豊かになる音楽をめざして学校やイベントで演奏活動をしています。

お仕事のやりがいを教えてください

- 地域住民同士、幅広い世代の方と友情を育みながら作曲できること
- 研究者・専門家の方とは違うアプローチで広く一般の方にヒグマに興味を持ってもらうことができること

ヒグマの骨笛がメロディを奏でる曲「ヒグマのうた」の制作では世界自然遺産の知床の森に地元の小学生と入りました。森で生々しい爪痕や食痕、巣穴などを見つけても臆することなく「ヒグマとの付き合い方なら知ってるよ！」と

かかりましたが、その途中、稜線上でいちゃつくクマのカップルを見たり、他の動物たちをじっくり観察したりと、様々な発見や出会いがありました。写真にならないその経験を得られることが、ひょっとすると何よりのやりがい、財産なのかもしれません。

**どうすれば写真家として
クマに関わることができるでしょうか？**

自分を表現者と思ったことはありませんが、出会った自然の素晴らしさを伝えたい、という思いはあります。野生動物も、写真も公の場で勉強したことはありません。自己流で始めて、いずれも10年ちょっとで年齢の割にはキャリアは非常に短いです。それでも続けてこられたのは、まずは周りの方々のご理解。そして、やりたいと思ったことは採算を度外視してやり続けたからでしょうか。野生動物の撮影は、ウケの良い派手な絵を効率的に撮るということを狙うと、自ずと有名スポットで同じようなシーンを撮ることになります。それも時には必要かもしれませんが、私は効率より自分の撮るべきものを優先して、歩いて被写体を追い続けました。撮り易い写真に流されず、撮りたい写真の撮影にトライし続けることが大切かなと思います。

**今後力を入れていきたいことを
教えてください！**

ヒグマとツキノワグマ両方を時間をかけて追い「日本のクマ」を紹介していく仕事がしたいですね。また、クマをはじめ野生動物との軋轢は増えてくると思います。そんな中で動物達の普段の姿を知っている、もしくは想像できる、ということは、冷静な対処をするうえで大切な要素になるのではないでしょうか。そんな経験や想像のきっかけを、多くの子どもたちに伝えていけたらと思っています。

二神さんの写真は
こちら▶

＜著書紹介＞
「森と川、山と海 ヒグマの旅」
二神慎之介　写真・文
文一総合出版
B5判 48ページ 本体1,800円
2021年9月11日刊行

胸を張る子供たちはとても誇らしげでした。木の実のマラカスや倒木の枝を木琴にした音などで出来た曲は子供たちと一緒にコンサートでお披露目し、知床ウトロ地区の皆さんに聴いていただきました。さらにこの地域学習の様子はNHK札幌「北海道クローズアップ」で全道に放送されました。

**どうすればミュージシャンとして
クマに関わることができるでしょうか？**

オリジナリティを大切にすることと、常に学び続けることだと思います。かつて、なんでも手作りしていた時代は自分たちで生活道具や衣装を作り、音楽も個性的で愛おしいものでした。現在、「自分らしさ」はどこにあるでしょうか。それを探しながら、地域の人と仲良くなることから始めて出来上がったジオミュージックは、勇気や誇りを感じられる音楽として地元で愛され、必要とされるようになりました。また、私はヒグマの会会員でもあるのですが、「ヒグマを学ぶことは北海道を学ぶこと」とヒグマの会が言うように、ヒグマそのものや研究者から得た知識がふるさと愛を深め、演奏にも反映されていると感じます。

**今後力を入れていきたいことを
教えてください！**

「ジオミュージックを生かす環境づくり」をしていきたいです。例えば知床で作曲した「ヒグマのうた」を、ヒグマが暮らす他の森で新たに“音探し”をする自然体験プログラムなどです。実際にこれまで、ヒグマが暮らす札幌の森で音探しを行ったり、釧路の森で猛禽類の生態系を学ぶ親子ツアーで新たな曲作りも行いました。出来上がった曲をCDやコンサートで聴いてもらうだけでなく、一緒に体験してもらうことで音楽のテーマをより強く共感していただけると思います。経験を生かし、このようなプログラムを全国各地でやってみたいです。

▲「ヒグマのうた」は
こちらから視聴可能です

Letters from

クマに関わるイベントや情報についてお寄せいただいたお便りを紹介するコーナー。今回は、北海道で行われたヒグマの会フォーラムのレポートをお届けします！

「2022 ヒグマフォーラムin旭川」に参加して

青野　凪（酪農学園大学　野生鳥獣管理学研究室　4年）

2022年11月19、20日に旭川市にて行われた「2022 ヒグマフォーラムin旭川」に参加しました。このフォーラムでは、ヒグマの専門家、研究者および市役所職員などの様々な立場でヒグマと関わっている方々が、ヒグマの都市部への出没時の対策について講演や議論を行いました。また、エクスカーションでは、旭川市で実際にヒグマが出没した場所や、獣害対策として電気柵を張っている場所の見学、旭山動物園の新しくできたえぞひぐま館のバックヤードツアーなどもあり、普段の生活では味わうことのできないヒグマにまみれた2日間でした。

フォーラムの様子
（撮影者：白根ゆりさん）

19日に開催されたヒグマフォーラムでは、テレビ局、新聞記者、および一般の方々も講演を聞きに来ていました。当日、私は受付を担当していたのですが、想像よりも一般の方の来場が多く、ヒグマの都市出没は大きな興味・関心を引いているのだなと思いました。特に、私は道立総合研究機構の釣賀さんの「北海道は小さな面積で、ヒグマと人間が絶滅せずに存在している世界的にまれな存在」という言葉から、まれな存在である北海道だからこそ、今後のヒグマの保護・管理により一層力を入れなければならないと感じました。

受付していました…！（右：青野さん）

20日に行われたエクスカーションでは旭山動物園にて、坂東園長にえぞひぐま館のバックヤードツアーをしていただきました。動物園の裏側について知る機会はほとんどないため、飼育されている動物や飼育員を守るためのバックヤードのセキュリティーの厳しさがとても印象に残りました。この2日間を通して、ヒグマをはじめとする野生動物の保護・管理に対して新たな視点を得ることができました。

とんこ（旭山動物園）

専門家、研究者および市役所職員のお話を実際に聞ける機会は少ないので、ヒグマへの普及啓発として今回のフォーラムとエクスカーションは、「道民一人一人がヒグマを理解し適切に行動する」ことに繋がり、とても良いものになったのではと感じています。

皆様のご意見を募集します！

新聞の投書欄をイメージしたコーナー、「Letters from」。皆様が日頃から抱くクマへの思いや共存に向けての考えなどを綴って、伝えてみませんか？ご投稿をお待ちしております!!

【応募内容】

字数：800～1,000字程度　画像：自身のお写真や投稿内容に関連するもの。

応募先：bj@japanbear.org

※次号以降の掲載を予定しております。詳細はMLをご確認ください。

事務局からのお知らせ

1．事務局連絡先

- 日本クマネットワーク（JBN） に関する各種問い合わせ先は、
  事務局：info@japanbear.org
  までお願いいたします。

事務局所在地
〒060-0818　北海道札幌市北18条西9丁目
北海道大学大学院獣医学研究院
野生動物学教室　下鶴 倫人

2. 会費納入のお願い

- JBNの活動は、主に会員の皆様からの会費でまかなわれています。
  規約により、**会費は前納制（2023年度会費は2023年3月31日までに納入）**となっております。
  未納の方は急ぎお支払いをお願いします。ご理解とご協力をお願いいたします。

【2023年度会費】

・**学生会員　2,000円／年**（小学～高校、大学、大学院、専門学校生）
＊学生でなくなる方は正会員への切り替えをお願いします。
・**正会員　3,000円／年**（学生会員以外）

- 会費納入状況は本誌発送に用いた封筒の宛名ラベルに記載されています。
- **２年以上会費未納の方には、未納分が納入されるまでニュースレターの発送を休止**致します。また、**3年以上会費未納の場合には自動退会**となり、**未納分を納入しなければ**再入会できませんのでご注意下さい。
- 複数年まとめての振込やクマ基金（一口1,000円）へ寄付される方は、振込用紙の備考欄に記載または事務局へお知らせ下さい。
- 会費に関するお問い合わせは事務局まで、お願いいたします。

お振込先

郵便振替口座：日本クマネットワーク

■ゆうちょ銀行からのお振込
口　座　番　号：00130-1-666956

■その他の銀行からのお振込
金融機関名（コード）：ゆうちょ銀行（9900）
支店名（支店番号）：〇一九（ゼロイチキユウ）店（019）
預　金　種　目：当座
口　座　番　号：0666956

3. 住所変更および退会等のご連絡のお願い

- 住所、所属、メールアドレスなど**会員名簿登録内容に変更のある方・諸事情により退会を希望される方**は必ず事務局へお知らせください。
- 連絡方法は、上記の**JBNのウェブサイトの問い合わせフォーム**からお願いいたします。
- 会費納入時に振込用紙の通信欄に事務局への連絡事項（住所変更、退会希望など）を記載しても変更手続き等は行われません。

一度でもニュースレターが宛先不明で返送された方には、次号からの発送を停止しています。住所変更はお早めにお知らせください。

新年度になり、住所等の登録情報が変わる方は、事務局までお知らせください！

4. メーリングリスト（ML）登録状況確認のお願い

- 入会時にメールアドレスを登録しているはずなのに、MLからの情報が届いていないという方がいらっしゃいましたら、上記事務局宛に氏名と登録希望メールアドレスを明記して、E-mailにてご連絡いただきますようお願いいたします。

vol.23-3 Contents

Bears Scene「白銀の林道コミュニケーション」浦田 剛さん・・・・・・・・・・・・・・・ 1
今号の表紙イラスト「クマの抱える問題」蜂矢 愛さん・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
People　坂東 元氏（旭山動物園園長）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
This number「アーバンベアP＆四国のクマ保護P」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
トラベルグランツ報告 渡邉 颯太さん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
クマ研究れぽ 34.井田 秀行さん「春、ブナの「花見」でクマ出没を予測する」・・・・・・ 23
JBN cubs「クマの調査研究を行う学生にインタビュー」・・・・・・・・・・・・・・・ 25
クマしごと Vol.7 アーティスト編・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
Letters from「2022 ヒグマフォーラム in 旭川」に参加して・・・・・・・・・・・・・・ 29
事務局からのお知らせ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30

Bears Japan Vol. 23 No. 3 2023. Mar ISSN 1881-3879

●編集員のくまエッセイ●

酪農学園大学野生動物生態学研究室で主にヒグマの食性について研究しています。編集委員長である伊藤哲治さんにお誘い頂き、Bears Japanの編集委員に入りました。一員になったのが今年度なのでまだ右も左もわからない状態ですが、少しでも素敵な記事をお届けできるように頑張っていきたいと思います。

ヒグマの調査・研究を始めてからクマグッズを集めるのが趣味になり、お気に入りのグッズを見つけたら必ずと言っていいほど買ってしまいます。おかげでお金がいくらあっても足りません…。今では店内においているクマグッズを瞬時に見つけることができるようになりました。目標は家の中をクマグッズで埋め尽くすこと、そして編集委員に入らせて頂いたので少しでもたくさんの人にクマ情報を共有できたらと思います。新型コロナウイルスの影響でいろんな人と出会う機会が少なくなってしまったので、JBNニュースレターを通してたくさんの人とつながりたいです。まだまだ未熟者ですが、どうぞよろしくお願い致します！

JBNニュースレター編集委員会
菊地 静香

Bears Japan Vol.23 No.3　2023. Mar.

JBNニュースレター編集委員会：伊藤 哲治・冨安 洵平・石橋 悠樹・安藤 喬平・中島 彩季・稲垣 亜希乃 ・三枝 弘典・長沼 知子・菊地 静香・竹腰 直紀

編集部(e-mail)：bj@japanbear.org
表紙イラスト：蜂矢 愛
印刷：株式会社　プリントパック
発行：日本クマネットワーク